作品募集

あなたの体験 想いをことばに

第23回 ふくい風花随筆文学賞

三方五湖（若狭町・美浜町）

風花とは
雪が舞い散る様子を
花に例えたもの。

特別審査委員長
出久根 達郎

1944年茨城県生まれ。
1992年『本のお口よごしですが』で講談社エッセイ賞、翌年『佃島ふたり書房』で第108回直木賞、2015年『半分コ』で芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。
2016年より日本文藝家協会理事長。
主な小説に『おんな飛脚人』『漱石センセと私』、エッセイに『古本綺譚』『作家の値段』など著書多数。

募集要項

■内　　容　随筆（エッセイ）
・テーマは自由（人とのふれあい、家族や旅の思い出、ふるさとへの思い、世の中の動きについて考えたことなど）

■応募資格　高校生以上

■応 募 料　無料

■応募規定
・A4判400字詰原稿用紙3～5枚以内（Wordなどワープロソフトで作成した原稿も可ですが、400字詰原稿用紙に換算して3～5枚に収まっているかを必ず確認してください）
・作品は日本語で書かれた自作、未発表のもの。新聞、雑誌、同人雑誌、インターネット上などに既に発表したもの、他の文学賞に応募したものは不可とします。
・作品とは別に表紙を付け、題名、氏名（ペンネーム可ですが本名・ふりがなも併記してください）、性別、住所、職業または学校名、年齢または学年、電話番号、公募を知った方法を明記してください。
・応募は直接福井県ふるさと文学館カウンターへ持参するか、郵送または電子メールに限ります。（電子メールによる場合は、作品を別ファイルで添付してください。PDF可）※応募作品の返却および選考経過についての問合せには応じません。

■締　　切　〈一般の部〉　令和元年10月31日（木）　当日消印有効
〈高校生の部〉　令和元年12月13日（金）　当日消印有効

■発　　表　令和2年2月下旬ごろ
（入賞者に直接通知するとともに、福井新聞紙上にて発表します。なお、発表後、ホームページ上に入賞者名を掲載します。）

■著 作 権　入賞作品の諸権利は、主催者側に帰属するものとします。
（入賞作品は、本文学賞の趣旨に沿って、入賞作品集や新聞、主催・共催団体等のホームページ・広報誌等で公表されます。）

■審査委員　特別審査委員長　出久根　達　郎（作家）
委　　員　増　永　迪　男（山岳エッセイスト）
中　島　美千代（作家）
大　河　晴　美（仁愛大学人間学部教授）
泉　　志　穂（福井新聞社文化生活部長）
冨　澤　宏　二（福井県高等学校文化連盟代表）

■賞　〈一般の部〉　最優秀賞　1名　30万円
優 秀 賞　若干名　5万円
U30賞　1名　5万円
〈高校生の部〉　最優秀賞　1名　10万円（図書カード）
優 秀 賞　若干名　3万円（図書カード）
佳　　作　若干名　5千円（図書カード）
奨 励 賞　20名程度　3千円（図書カード）

応募先
〒918－8113　福井市下馬町51－11
ふくい風花随筆文学賞実行委員会事務局（福井県ふるさと文学館内）宛
TEL（0776）33－8866　　Eメール：kazahana@pref.fukui.lg.jp
URL：https://www.library-archives.pref.fukui.lg.jp/

この文学賞は、福井県出身の作家津村節子氏の随筆集『風花の街から』にちなんで始まりました。

裏面に入賞作品を掲載しております。

《主催》ふくい風花随筆文学賞実行委員会　《共催》福井新聞社、学校法人 福井仁愛学園　《特別協賛》公益財団法人 げんでんふれあい福井財団　《後援》福井県、福井県教育委員会、FM福井

入賞作品の紹介

第二十二回 ふくい風花随筆文学賞
一般の部　最優秀賞・福井県知事賞

父のサプライズ

大阪府　松田　良弘

ある日、実家の兄から電話があった。父が私達兄弟に頼み事があるらしい。そんなことは珍しいので少し不安だったが、私は休日に実家に帰った。

母が買い物に出掛けると、父は兄と私を呼んだ。

「頼みと言うのは、母さんに内緒で、お前達に木曽駒ヶ岳に登って来て欲しいんだ。」

突然の父の言葉に、私達は顔を見合わせた。

「山登りが好きだった俺と母さんは、新婚旅行で木曽駒ヶ岳に登ったんだ。そして山頂で母さんに約束したんだ。その約束を果たす手助けをして欲しい。サプライズってやつだ。この前テレビで木曽駒ヶ岳の番組をやっていて、それを見ていた母さんの顔が、どこか寂しそうだったんだ。」

父は母に山頂で、こう約束したそうだ。

「またいつでも登りに来よう。歳を取った時は、おぶってでも君をここに連れて来るよ。」

しかし数年後、母は事故で膝を怪我して、もう登山は出来なくなってしまったのだ。母が登れないのならと、その後父も登山を止めてしまった。

「そこでだ。お前達にビデオカメラで、お前達の目線で登山風景を撮影してきて欲しいんだ。車のドライブレコーダーのような、臨場感のある映像を、母さんに見せてあげたいんだ。登山をしている気分だけでも味わせてやりたいと思って。本当は俺が行けたらいいんだが、さすがにもうこの歳じゃな。」

残念そうに父は話した。両親の影響か、私達兄弟も登山が趣味だった。何だか面白そうだなという思いと、父の母への想いに心を打たれた私達は、この願いを引き受けることにした。

年が明けた正月、家族全員が実家に集まった。宴会が一段落した頃父は母に、

「母さんにお年玉だ。今から見るぞ。」

とニヤニヤした顔で、一枚のDVDを母に渡した。それは、編集作業が終わり、父のチェックも済んだ、あの登山の様子を収めたDVDだった。いよいよ木曽駒ヶ岳登山の、上映会が始まった。

季節は新婚旅行と同じ十月中旬。ケーブルカーの車窓から始まる映像は、千畳敷カールに着くと、息を飲む様な紅葉の絨毯を映していた。見上げれば、木曽駒ヶ岳が私達を見下ろしている。そしてカールを抜け、険しい岩道を進む。その映像は、今この瞬間、自分が登山をしているように、とてもリアルな景色を映していた。途中の休憩風景や、他の登山者達の笑顔も撮影しながら、数時間後私達は山頂に着いた。父からの細かなルートとカメラアングルの指示通り、私達は無事にミッションを果たす事が出来たのだった。

カメラは山頂の大パノラマを映している。すると、一人の女性の後ろ姿を捉えた。そしてその女性がこちらを振り向いた。カメラがズームする。そこに映っていたのは、なんと母だった。

実は私達は、父に逆サプライズを仕掛けたのだ。父の頼みを引き受けた私達兄弟は、

「親父にはまだまだ頑張って貰いたいから、いっそのこと母を連れて行って、母から親父に〝喝〟をいれて貰おう。」

となったのだ。木曽駒ヶ岳にも何回か登ったことがある二人でなら、母をサポート出来ると思った。母に父の想いを伝えると、初めは涙を流して泣いていたが、次に私達の計画を打ち明けると、母は子供のようにはしゃいでいた。

翌日から、母はこっそりリハビリ医院に通院し、スポーツジムにも通った。おかげで母は、ほとんど自力で山頂まで登ることが出来たのだ。登山当日に母が家を空けるのは不自然なので、父には私から、

「俺が出張ということにするから、母さんに子供の世話を頼んでいいかな。嫁さん一人だと大変だから。」

と伝えていた。そして登山の後、父には事前に母が映っていないDVDを編集して渡しておいたので、さっきこっそりと取り替えておいたのだ。この一大作戦は、家族全員がグルになって遂行された。

「お父さん。気持ちは受け取りました。でも約束は果たせて貰ってませんよ。やっぱりここへは、お父さんと一緒に来たいです。私はもう大丈夫です。お父さんがダメなら、私がお父さんをおぶってあげますよ。」

カメラの前でイタズラっぽく笑う母を見て、父は呆然と口を開けたままだった。

入賞作品の紹介

第二十二回 ふくい風花随筆文学賞
高校生の部　最優秀賞・福井県知事賞

あくまで天使

福井県仁愛女子高等学校
島田　萌美

赤ちゃんのにおいがした。それはミルクのにおいなのか、お母さんのにおいなのか、よくわからないけど、とても甘くて守りたくなるようなにおい。しかし同時に憎いという気持ちが湧いてきた。それはドロドロしていて胸のあたりが痛かった。

小学校6年生の冬。私たち家族はそわそわしていた。今夜、赤ちゃんが生まれるというのだ。それはつまり私に妹ができるということで、私はとても興奮していた。家には赤ちゃんを迎え入れるためのベビーグッズが増えていった。お父さんもおじいちゃんおばあちゃんもうれしそうで、もちろん私もうれしかった。生まれてくるのが女の子だということは分かっていた。人に言うと必ずと言っていいほど毎回驚かれるのだが、私達は二人姉妹である。つまり十二歳差の姉妹だということだ。一人っ子はわがままだ、なんて最初に言い出したのはいったいどこの誰だろう。しかし確かに私はわがままで、そして甘えん坊だった。そんな私は妹ができるということが、姉になるということが、どんなに大変でどんなにつらいことなのかというところまで考えが及んでいなかった。

天使みたい。まずそう思った。触るとふわふわしていて、食べたら絶対おいしいな。そう確信した。私の好きな本にこんなフレーズがある。

「赤ん坊というのは、その弱さで一人では決して生きられないから、神様が天使のように愛くるしく作ったのだという話を聞いたことがある。そのあまりの可愛さで、周りの人が思わず面倒を見てしまうように作ったのだと。」

なんて優しい言葉なのだろうと思う。そして私はこう思うのだ。私は親から、父から愛されていたのだろうかと。

妹と私は顔が全く似ていない。父親が違うのだ。私のこの胸のモヤモヤはそこからくるものだろう。私は父のことを憎んでいる。私のことを捨てたのだから。私はずっとそんな汚い気持ちを抱きながら生きてきた。それなのに妹はどうだ。みんなが妹の名前を呼ぶ。妹を抱く。妹にほほ笑みかける。目の前のその光景を私はいったいどんな顔で見ているだろうか。時には殺人鬼のような顔をしているかもしれない。私はそんなできた人間じゃないのだ。お父さんと妹がじゃれているのを見て、「私はこんな風に父に愛されていただろうか。」ともらす。母は決まって「もちろんよ。」と言うけれども私は更にみじめになるだけなのだ。神様の一番の失敗は人間に赤ちゃんの頃のことを覚えておける能力を与えなかったことだ。おかげで父との思い出がない。

ふわふわの小さい生き物が私にほほ笑む。嫌いだ。この笑顔が嫌いで、そして自分が嫌いなんだ。私はどこまで堕ちていくのだろう。こんなに可愛い生き物が私の心を汚していく。悪魔の様に。

姉の役目はもちろん妹を守ることである。妹が泣いたら「どうしたの？」と優しくあやし、おむつも替えてあげる。なんていい姉なんだろう、そう思う私は醜い人間。

妹が少し言葉を話すようになってきた頃。私は妹のそのおいしそうなほっぺをぷにぷにしていた。そうしたらその天使は口を開いた。

「ねえたん。」

ああ、全くかなわないや。神様の作戦は大成功だ。こんな愛くるしい表情で私のことを呼ぶ生き物を私は愛おしく思わずにはいられないじゃないか。『可愛いは正義』とはよく言ったものだ、そう思っていたがその通りだ。妹のその一言が、私の憎悪の気持ちなんてどこかへ飛ばしてしまうのだ。

妹はやはり今日もみんなから愛され、すくすく育っている。相変わらず私はさみしい心を持ち続けている。でも、

「ほら、おいで！」

この妹をとことん愛してみよう。そう思うんだ。私がさみしかった分も。